

中国における舞踏（BUTOH）の展開について

WEN DURILE（お茶の水女子大学大学院）

1. 研究背景と目的

舞踏は、土方巽と大野一雄を中心に、既存のバレエ、モダンダンスなどの表現の枠組みを根底から問い直し、解体し、独自に展開した日本発の画期的な前衛舞踊である（岡本, 2014）。時代の変化と共に国際的な影響力を持つようになり、世界各地で舞踏家たちの活動が活発化している。この中で、中国でも舞踏の活動が増加傾向にある。本研究では、中国における舞踏の発展状況を主に中国の舞踏家らに向けられた批評を通して明らかにするとともに、彼らが期待する舞踏の表現形式としての特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究の研究方法は、文献資料研究である。使用する文献資料は、中国における舞踏家と舞踏カンパニーの公演やワークショップの開催案内、公演評などを収集し整理分析する。具体的には舞踏に関する文献に加えて、インターネットで「中国における舞踏に関する活動」というキーワードで検索し（2021/10-2023/9）、中国における舞踏に関する資料を収集する。それらの資料より舞踏家の活動数、公演やワークショップの内容、それらに向けられた描写や批評などの点から整理する。加えて、中国人舞踏家杜昱枋への本研究によるインタビュー記録（2022/9/11）を資料として用いる。

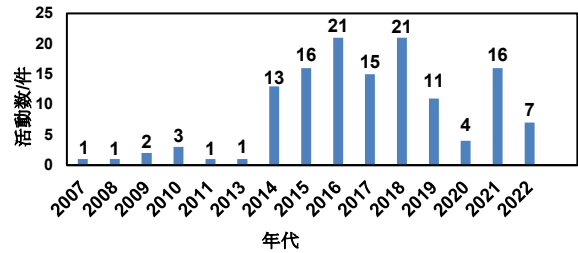
3. 結果と考察

(1) 中国における舞踏の活動数の変遷

日本の舞踏家・舞踏カンパニーは、日本の国際交流基金や中国の文化交流団体などの支援を受けながら、2007年よりワークショップや公演活動を開催してきていることが確認される。例えば、田中泯（2008/11、2009/3）、和栗由紀夫（2011/3）、大野慶人（2017/9）、山海塾（2018/11）がこれにあたる。

日本人舞踏家の中国での活動の結果、舞踏に情熱を注ぐ多くの中国人が現れる。そして彼らは、日本人舞踏家の指導のもとで舞踏への理解を深め、独自の舞踏グループを立ち上げる。例えば、杜昱枋（ドウユウファン）、胡高陽（ココウヨウ）、許曉雷（キョギョウライ）などが挙げられる。

2007-22年の間に行われた日本人および中国人の舞踏家／カンパニーによる中国での活動の開催件数は図1の通り確認される。



<図1>2007年から2022年までの中国における日本人および中国人舞踏家・舞踏カンパニーの活動数について（同一上演作品の複数地開催も1件とカウント）（筆者作成）

図1に示す通り、舞踏家による中国公演は2007年に始まり、2014年以降急増する。特に2016年から2018年にかけて、年間約20件の公演が開催され、ブームになった。2020年にコロナ禍となると、舞踏活動はオンラインで行われることが主となり、舞踏活動に影響を及ぼした。

(2) 中国における舞踏家らに向けられた批評

中国における舞踏の研究者たちは、舞踏の内容や表現形式に関する文献を発表し、舞踏の振り付けなどを学術的に探求している。例えば、張玉玲（2019）は山海塾について、ダンサーの身体が観客に自然のすべてを見るかのような感覚を味わわせると述べている。同論文では、舞台作品が自然の法則や生命のサイクルにインスパイアされており、その中で万物が生まれ変わり、最終的に静寂へと還るという東洋の哲学的な視点が作品に反映されているという解釈が見られる。また大野慶人の『花と鳥』上演評（2017）には「異なる美の形成」とあり、老いの美を提示したことへの着目が確認される。このように舞踏の表現形式に見られる、万物流転の視点や老いの美への変容への関心が確認できる。

(3) 中国の舞踏家の活動の実際

杜昱枋（舞踏白狐系主宰、2014-）は舞踏家桂勘とともに、身体の探求をテーマに中国各地でワークショップや公演を行っている。杜は代表作である『胎児の夢』（2014）において、舞台を「夢の時間と空間に属する」と位置づけ、身体からの記憶を探求し、身体には目に見えないが存在するものを可視化しようとしている。杜にとって、舞踏は身体の未知の領域に光を当て、身体から学び、自己への問いかけを促す手段となっていることがインタビューを通して明らかになった。

【主要参考文献】

- ・岡本章ら(2014)『新たな系譜学をもとめて—アート・身体・パフォーマンス』株式会社フィルムアート社
- ・張玉玲(2019)『虚空、缓慢与飘浮——记山海塾之《缓缓飘落之中——帷幕》』中国舞踊雜誌